

昭和六十一年三月より 栄町体育会相談役

昭和六十三年四月より 立川国立地区交通安全協会栄

支部総務

(東京都 石川 祐常)

シベリア抑留の体験

新潟県 長谷川 元 美

山神府から孫呉の頃(終戦)

ソ連の参戦により、私達の部隊、特別補充下士官候補者教育隊(竹下部隊)は、ソ満国境の山神府を出て、後方の孫呉へ撤退することになった。

孫呉まであとわずかの地点まできたとき、そこは丁度ソング街道と広い軍用道路の交差点附近であった。

孫呉の司令部から伝令が来て、我が竹下部隊に対して将校を長とする二十四名の対戦車肉迫攻撃隊を編成せよと命令が下された。

それは敵ソ連軍の戦車二十四輛が、ソング街道を孫

呉に向かって進行中であるという情報が入ったからであった。

急造爆雷はおって届けるということである。部隊本部は、我が第三中隊にその肉迫攻撃隊の編成をせよと指示を出したのである。

広い道路上に中隊が二列横隊に並んで、いわゆる決死隊の志願を申し出るように達したのであるが、誰も言って出る者が無い。

そこで私達第一小隊長の田中大尉が、私の方を向いて、どうかと問われたので、出ないわけに行かなくなり、志願の意志表示をして一歩前へ出た。すると一人おいて隣りにいた門馬同年兵も前へ出た。その後、次から次へと三十名くらい、志願者が出たようだった。その中から二十四名の人選を中隊長と田中大尉が行った。

「長谷川は、孫呉の陣地へ入ったら、中隊の兵器係を担当しなければならないので、決死隊は駄目です。」と田中大尉から中隊長に話があって、私は決死隊の難を逃れた。

人選の結果、見習士官を長とした、二十四名の対戦車砲攻撃班が編成されたのであった。

最初に田中大尉が私に目で合図したのは、誰か一人が申し出れば、連れられて出る者があるを見て、私を囿りに使ったのであった。

敵は、竹下部隊が決死隊を編成したという情報をスパイか何かで得たのであろう、我々の方には来ないで、別の方へ方向を変えて行ったと司令部から情報が出て、一安心したのである。そのあと二十四個の急造爆雷が到着したのであった。

八月十三日、我が竹下部隊は、第一中隊を二站の陣地に残して、敵の爆撃の中、荒神山の陣地へ入ったのである。十三、十四、十五日の昼間、敵は軽爆機と戦闘機で、孫呉の全陣地に対して、繰り返し空襲を行った。それでも大した被害は出なかったもようであった。八月十五日の昼過ぎになって、陣地の稜線一带に白旗が立てられた。それを、まさか我が軍が降参したと思つた者は誰もいなくて、他の戦線の状況がわからない我々は、敵の降参だとばかり思つて、語り合つたの

である。

八月十六日夜、敵のいない、自分達ばかりの武装解除を行った。武器を二度と使用できないように、銃器類には銃口から正油とか油類とかを流し込んで、刀剣類は刃を目茶目茶にして穴を掘って埋めた。

その夜、田中大尉からお話があった。

「明日からどうなるかわからないが、とにかく、我が小隊は最後まで皆一緒に行動をとろう」。

十七日朝、下山して、割り当てられた軍の官舎街の一部分に塙を廻らして、その中に收容された。

ソ連軍が入って来たのは、二三日してからだと思う。その收容所で九月十四日まで、唯何もすることなく過ごしたのである。

満州からシベリアの收容所まで

昭和二十年九月十四日。私たちは終戦以来その日まで、孫呉の軍官舎の有刺鉄線を巡らせられた中で、ソ連軍の監視の下、收容生活を続けていた。

上からの命令で、これから日本へ帰国のためにこの地を出発することになった。途中、警戒兵から、黒竜

江を渡って、シベリア鉄道でウラジオより帰るのだと聞かされた。

その夜は、満州領内のどこだかわからないが、広い道路の周辺で露営をしているうちわかったことだが、その辺はソ連軍と戦闘のあった場所らしく、まだソ連兵の死骸があちらこちらに散在していた。

九月十五日、黒龍江のほとりに到着した。たしか午後二時か三時頃であったと思う。警戒のソ連兵はのんびりして、持っていた手榴弾を川に投げ込んで魚を取って、我々にも食うようにすすめたりしたことが印象に残っている。

その黒龍江を渡ったのは夜になってからで、渡した舟は貨物船か輸送船のようなものであったと記憶している。

その夜はよく晴れた満月であった。舟の甲板から月をながめ、ああこの月を故郷で、父や母、そして弟妹たちも見ているだろうかと思つて、なぜか、あついてものがこみあげてきたのが、いまだに忘れることのできない思い出の一コマである。

下船したその夜は、川のほとりで、シベリアでの第一夜の露営となった。その翌日から収容所に入るまで、辛い行軍の連続であった。

まず一日行軍しては、コルホーズかソホーズかの農場で、薯掘りと麦刈りの作業を来る日も来る日もやらせられた。

「ヤボンスキー、トーキョ、ダモイ、ハラシヨ」

警戒兵からデマを言われ、望郷の思いを新たにして行軍を続けた。

あるとき先頭の方で声がした。

「向こうにシベリア鉄道が通っているぞ」

あわてて見てみると、地平線上に汽車の煙らしいのがなびいている。

本当にダモイができるんだと喜んで進んで行つてみると、実はそれは汽車の煙ではなく、農場で働くトラクターの煙であることがわかつて、がっかりしてしまつたこともあった。

孫呉を出てから何日ぐらいたつてか、持って来た米や麦も食いつくし、農場から貰う薯だけの生活となつ

た。また来る日も来る日も露営の連続で、みんな、気力も体力も使い果たした。

「一晩でよいから屋根のあるところで寝てみたい。そして一杯でいいから味噌汁が飲みたい」。

だれからともなく口から出るのであった。

最初のうちは、警戒兵たちの言われるとおり行動範囲を守ってきたので、彼等の間に大したトラブルもなくやってきたが、ここらまで来ると、いつ汽車に乗れるのか、まだどのくらい歩かなければならないのかわからない、安がつのり、ついダラダラの生活行動となり、警戒兵の威嚇の銃声が度々聞こえるようになった。身の細る思いの日々が続く毎日となった。

十月四日、この日は午前中はまずまずの天候で全員薯堀り作業であった。今までは、作業をやりながら、故郷のことや、身の上のこと等語り合ってきたが、毎日の行軍と、ろくなものも食べずに作業をやらされていて、身体も心も疲れて、話をする気力すら失っている状態であった。

そこへ午後から空もようが急に悪くなってきて、二

時頃から雪がちらついてきた。

防寒具など何も持っていない我々は、作業どころではなくなった。

雪が降り出してから小一時間くらいすると、大きな牡丹雪に変わってきた。それでも「作業止め」の号令はかからない。

ただ皆畑にしゃがんでいるだけで、作業等しているものは一人もいないのだが、命令が出ないので、畑から出るわけにもいかなかった。

四時頃だったと思う、ようやく「作業止め」の号令が出た。今夜はどこか屋根のあるところへ連れて行って貰えるのかと期待して装具の置いてある所へ集っていたら中隊長の指示が出た。

「今夜はこの場所ですべて野宿する。」皆顔を見合わせてがっかりしながら語り合った。

「この雪の降る中で、どうやって一夜を過ごすのか。」雪が降っている中で焚き火の材料を探し出すのも大変なものである。貰った薯を煮ることもできず、また焼くこともできず、その薯を洗いもせず草や木の葉で

拭いて泥だけ落として、寒さにふるえながら、生のみまで夕食とするほかなかった。

また寝るにしても、我々の持っているものは、携帯天幕一枚、毛布一枚、外套一枚くらいであった。二人一組になって一枚の天幕を下に敷き、毛布や外套をかけ、その上に天幕をかけ、二人身体を寄せ合って暖をとるしかなかった。

十月五日、寒さの中で目がさめると、天幕の上にも畑にも草原にも霜がおりて一面真っ白となり、地面がカチカチに凍りついていたのにはびっくりした。

ソ連軍の命令か指示だったかはわからないが我々に伝えられた。

「今日シベリア鉄道のある町へ行くのだ」。

本当に日本へ帰れるのかと半分くらいは本気にして、歩きながら故郷のこと等話して行軍を続けるのであった。

夕方近く、大きな町らしいところへ着くと、なるほど汽車の音も聞こえてきた。汽車の煙も見えてきた。すっかり帰郷できると信じて、今までの疲れも忘れて

歩いていると大きな門のある前で止められた。

門の中にはガランとした大きな建物三つか四つはあったろうか、その中の一つの建物に我々は入れられた。

今夜はここに寝て、明日はダモイの命令があるはずだとだれからともなく、そんなことが伝わってきた。

その夜は、満州の孫呉を出てから二十日ぶりに屋根のあるところで寝れるという喜びもあり、雨や寒さの心配をせず本当によく眠れた。

みんな安心してよく眠り、故郷や家族のこと等、いろいろな夢を見たことであつたらう。

だがしかし、その場所が実は、ライチーハ第十九收容所というところであり、長く俘虜として、強制労働を強いられ、疲労困憊、栄養失調で大勢の戦友達を失う場所であることをそのときだけが知っていただろう。

シベリアでの收容所生活

昭和二十年十月五日、ライチーハ第十九收容所に入られた私達は、貨車からの荷物おろしが最初の仕事であった。夜中に起こされて、食品の荷物おろしをさせ

られたが、(塩物魚類、乾燥したクロパン)、これらはいい仕事だった。

仕事をしながら袋を破って、中の食品を失敬するところができた。また満州から持って来た機械類の荷おろし作業では、我々の中に機械に明るい人がいて、この機械はどこを毀せば使い物にならなくなるか我々に教えて、ボール等で毀してからおろしたことがほとんどであった。

また、ひどかったのは材木おろしであった。貨車からおろしたのはよかったが、その材木を何百メートルも離れたところへ運ぶのである。車も道具もなく、人間の肩でかついで運んだ。その材木は洞窟兵舎を造る材料だった。

「これはドイツの捕虜を入れる建物だ。この作業が終わったらお前達は、トッキー ダモイだ」。

ソ連現場監督から言われて、一生懸命働いた。しかしそれはとんでもないウソで、実は我々が入られる建物であった。

できあがったその洞窟兵舎に移った日から、本格的

捕虜としての生活が始まったのである。

十個大隊で約一万名位。

私達は第六大隊、第四中隊、第三小隊で、作業は大体この編成でやってきたのである。

私達の小隊長は小野曹長(経理出身)で、作業は大炭坑(露天掘)の中の鉄道移動作業であった。

中隊のいろいろな作業の中で、一番ノルマの上がない割の悪い仕事だったので、食事はよくて丙食(三級食)であった。

内容は、朝食は荒い何かの粉を溶かしたものを煮立てたもので、炊事ではスープと言っていたが、これも、我々にすれば楽しみにして待ち遠しいものでした。

昼食はクロパンの乾燥したもの、現在私どもが食している食パンの八枚切りを小型にしたもので、これの分配が大変でした。

当番に当たった者は公平に分隊員の数に分け、皆に見てもらってこれでよしというところで、くじ引きで分けるのだが、それでも不満をいう者もいた。

夕食は朝食よりも少し濃いめのものを飯盒のフタで

八分目位の量で、これが作業から帰ってもなかなか上がってこない、ともすれば七時頃になることもたびたびあった。

二十一年三月頃、収容所全員でシラミが湧いて大変な時期があった。あんまりひどかったので下着を水浸しにして、零下三十度の外へだして、凍死させようとしたことがあった。

成虫は死んだが、卵は駄目だった。そんな状況を見兼ねて、ソ連司令部では対策として、簡単ではあったが、風呂を用意して、一週間に一回くらい入浴できるようにし、被服を熱風消毒する設備もつくった。それを何回か繰り返し返しているうちにシラミは尽きたようだった。

二十一年の春頃から栄養失調による死亡者が続出した。多い日で十八人も死んだことがあった。たしかない時は忘れたが、私の分隊でも秋田県出身の阿部長蔵という三十四、五歳の妻子のある仲間が突然倒れ、病院に入れたが間もなく死亡した。

死亡者が出ると、分隊から一人だけ出てお通夜をつ

とめることになっていたので、私もそれに出た。

いつもだと何人も死亡者がいるので、お通夜も数人で過ごしたらしいが、その夜は収容所内で二名の死亡者しかなく、せまい屍屋に（間口五メートル、奥行が七メートルくらいで、通路が一メートルくらい）二人だけだった。

はじめのうちは少し気味悪く、石炭を取りに行くにも小便に行くにも二人一緒に行動した。部屋に残ると四十五、六体の死体とただ一人でいることになりどうしようもなかったが、それでも馴れてきたら一人でもいられるようになった。

その年の夏、胃の痛みなど知らなかった私もひどい胸焼けに悩まされた。こんな痛みが続いては、私もここで終わりがかなと思った。そんなとき、いつかだれかが言っていたのを思い出した。

「胸焼けには焚火の炭（糞）を呑むとよい」

何でも試してみようとソ連人の労働者が昼どきにカルトーシカ（ジャガイモ）を焼いていた場所へ行って、糞を拾って食べようと思ってかんでみた。

しかしこれは何とも言いようのない感じで、とても呑み込めるものでなく、そこで布に包んで線路の上でたたいて粉にして水と一緒に呑んだら、あれほど頑固だった胸焼けと下痢が一回で治ってしまった。

この年の四月頃だったか、「日本新聞友の会」という民主団体が収容所内の何か所かで結成された。我が中隊でも音頭をとる者がいて、一グループだけ、十名位で結成された。

分隊からは、日ノ谷君と私の二人が加入した。私達の加入目的は、これに入ると内地では読めそうもない本が借りられて読めるということだった。小林多喜二、宮本百合子、平林たい子など、まだ内地では発売禁止となっていた本を読むことができた。

ところが、結成から二週間もしないうちに、右翼の中隊長によってこの友の会も解散させられてしまった。それから間もなくして、今度は赤軍司令部の肝入りで、一個中隊、一グループ以上は必ず友の会を結成するようにという指示が出た。

今度は中隊長も動いて結成を呼びかけたが、前のこ

とがあつたので、だれもやろうという者がなく、最後の手段として、私と日ノ谷君のところへきて何とかしてくれないかといわれた。私たちが固辞していたところ、分隊で満州日日新聞、朝日新聞他の記者であった者がいた。

「われわれが後押しするからやってみたら」

その人達がいうので一応届け出を出した。後でわかったことだが、この人達は左翼思想の持ち主で、赤軍司令部にも通じていた人達であった。

この友の会の中隊責任者を引き受けてみたものの、夜作業から帰って点呼のとき、日本新聞の記事の中からいくつか取り上げて、それらの説明と解説をやらねばならなかった。こういうことに経験の全くない私には、なかなか大変な仕事であった。

その頃収容所内に二つの食堂ができて、収容所内にいるときは、そこで食事をすることになっていた。食糧事情もかなりよくなつてきて、食堂にゆくのが楽しみになつてきていた。

あるとき食堂に入つてびっくりしたことがあつた。

なんとテーブルに並べてあった食、物はキウリが二、三本と、お湯同然のスープだけという食事が、三日間も続いたことがあった。

説明によると、雨天がつづいたため、道路がぬかるみとなって、交通が思わしくなく、食糧が入ってこないのといふことだった。

こんな食事でも作業は相変わらずきびしく、みんなそれでなくても作業意欲もなく、フラフラの状態で、監督達とはトラブルが続出し、ノルマも上がらず大変なことがあった。

二十二年の一月頃のある夜、消灯になってから衛生兵が中隊へ来て伝えていった。

「長谷川さん、あなたは明日の作業に出なくてよいから。栄養失調で保育隊へ行くので、明朝日本軍の軍医の診察を受けるように」。

寝ていた中隊の者が起きて、

「長谷川が栄養失調とはうまくやったなあ」。

あっちこちでささやいていた。私自身も何かの間違ひではないかと思うくらい、その頃は健康状態は悪

くはなかった。

診察に行ったら日本の軍医が二人いた。

「これはマダムドクトルの間違いだな。どう診ても栄養失調の身体ではない」。

一か月に一回、ソ連の女医による健康診断が行われていた。そのとき各自のカードに結果を書き込むことになっていたが、私の前か後の人の健康状態を間違えて私のカードに書き込んだじゃないかと軍医達は二人で話していた。

「とにかく、女医さんのサインがはいっているから、私達にはどうにもならないから、儲けたと思つて保育隊へ行って三か月遊んで来ればよい」。

そんなことで私は保育隊へ行くことになった。

保育隊は弱兵だけの收容だから、労働は所内の軽作業だけであった。私は保育隊では三小隊長兼第一分隊長であった。

仕事は、午後三時頃までに明日の作業要請があった分に対して、小隊員の作業割り当てをして、これを夕方の方の点呼時に小隊員に伝達することであった。

また昼間、小隊員の作業の状態を見廻ることも仕事のうちであった。

見廻って歩く中で、軽作業とはいうても大変な作業もあった。凍った便所の清掃作業である。かなり深い便所であったが、極寒時には多勢で使用するのだから凍った大便が柱のようになるのである。これを私達は忠霊塔倒し作業などと言った。

ツルハシや、バールで掘るのだが、なかなか固くて作業ははかどらない。その上、そのときとび散った粉末が着ているものについて、あたたかい部屋に帰って来ると、それがとけて、臭いがして大変であった。

そんな作業を割り当たった者は文句を言うし、仕事に出たがらないし、これを説得するのも一苦労であった。

保育隊での生活は三か月で原隊に復帰させられた。原隊に帰っても、保育隊帰りは重労働免除であった。

原隊へ帰ってからの私の仕事は炊事関係ということで、炊事の方へ行ってみたら、仕事は担当のソ連人と日本兵三名が小型のトラックに乗って地方へ出かけ、オー

ダーによって野菜を買い付けし、一緒に行ったトラックに積み込んで帰す。そしてまたトラックが来るまでに買い付けをしては積み込むという仕事である。

ところが産地のコルホーズかソホーズへ行ってみると野菜はなくて、そのかわりに牛乳を買って積み込むということが多かった。

これはカロリー計算で代替をするのだという。その牛乳は、色々な入れ物（バケツ、タライとか）に入れて凍結させたもので、その形のまま麻袋に入れて積み込むのである。

このときの失敗談を一つ。私達は宿泊を民家にお願いして、老夫婦と、若夫婦のいるある民家に泊まることになった。

最初の夜、自分達の夕食の支度のときである。その家の玄関においた荷物から、収容所の炊事から持ってきた塩魚を取り出していたとき、その玄関の脇に牛の親子がいる小屋があった。仔牛が出て来て、何か欲しそうな顔をして見ているので、私は魚をいじった手を出したら、べろべろとなめ始めたのをみて、だれ

かが、「牛には塩気が必要なんだ、この牛は塩気が不足しているんじゃないか」と言うので、なに魚だったか忘れたが小魚を一つ仔牛にやってみた。

そしたら喜んで食べた方がいいが、すぐに苦しそうにぐるぐる廻り出した。私たちは心配になって、家の人を呼んだら、嫁さんらしい人が出て来て、真っ青な顔になり、

「大変だ、魚のホネが喉に刺さった、これは困った」

大さわぎになった。そこでその嫁さんらしい人は、ウデまくりをして、仔牛の口の中へウデを突込んで、探っていたようだったが、

「エース、エース」

といいながら仔牛の喉から魚のホネを取り出して、

「この親牛は政府から借りているので、この仔牛を政府に返さないと親牛は自分のものにならないんだ」と言うんです。

私共は申しわけなくて、何とも言いわけのしようもなかった。

いよいよ帰国の日が来る

二十二年の四月の初め、ひとまず収容所へ帰って中隊の方へ顔を出したら、丁度ダモイ編成の人員の確認の最中であつた。

我々も(同じ新潟県の佐藤藤治君と二人)この名簿に加えてくれるように頼んだら、当日の三時現在員の構成で、三十分過ぎているから駄目だという話であつた。

しかしわずか三十分くらいでしかないし、最後でいだからと無理につけ加えてもらった。

ところが、それから三日間くらの間、毎日赤軍司令部からの指示として、ダモイ名簿より何名かが除かれていくのであつた。その不足分は他の隊から追加という形で入ってくる。

私達も後から附け足して貰ったのだから、除かれるかなと思つて毎日ビクビクしていたら、運よく最後まで残つた。

四月五日、ダモイ列車に乗せられてライチャーハの駅を出発した。ライチャーハからナホトカまで七、八日く

らいかなかったと思った。そのとき私は、以前炊事に關係していたからかどうかわからないが、列車の炊事係をやらせられた。

貨車輸送で他の人達は外を眺めることはできなかったが、炊事車は扉を開放しっぱなしだったので、ナホトカに着くまで勤務（一日交替）している間、シベリアの窓外を見ることができた。

四月十五日、迎えの船「永徳丸」が入港した。波止場まで収容所長が見送りに来て、我々に対していままでの労をねぎらう言葉をかけてくれた。

私達の乗った永徳丸をソ連の将校が三名、小さな船で後を追ってきた。彼等はソ連領域まで帰って行った。

真つ青な日本海を四日間かけて、一路舞鶴に向けて航海を続けた。船内では、内地で咲いた桜の花を持ち込んだり、また、赤飯を出したりして、我々を慰めてくれる歓迎ぶりであった。

遠くに内地の山が見えてきたときは、ああ、やっと日本へ帰れたと、安堵の吐息が出た。また舞鶴湾に

入って、左手の山々の杉の木を六年振りに見たとき、「これが本当の日本なんだ、そして本当に日本に帰ったんだ」

という想いで胸がいっぱいになったのは私一人ではなかったようだ。

舞鶴に上陸して、与えられた宿舎に落ち着くと間もなく、呼出しアナウンスがあった。

「今から呼ぶ者は、エルエス調査班に来るよう」と。

「三十三中隊、長谷川元美」

一番先に私の名前が呼ばれた。数えていたら、十三名の者が名前を呼ばれた。

調査室に行ってみると、米軍の将校が三、四名いて、一枚の紙がみんなに渡された。みると、「この度の戦争は、日本と連合軍とどちらが悪いか」とか、「ソ連の生活は良かったか」とか、「今アメリカのあなたたちに対する取り扱いが良いと思うか」とかの質問が書いてあった。

それに対して、○×式で表現するようになっていた。

はじめての〇×式のアンケートであった。

ここまでできて帰れないようなことになってはと思っ
て、アメリカや連合軍の方に有利な答えに〇をつけて
何とかその部屋を出して貰った。

これで最後の関門を通過することができて、やっと
帰郷の途につきことになった。

【執筆者の紹介】

現住所 新潟県東蒲原郡津川町

大字清川六〇七番地の一

生年月日 大正十年六月十日

入 隊 昭和十七年八月一日 金沢東部第四十九部隊

” 十一月十五日 満州第四六二一部

隊(虎林)

昭和十九年五月 北安

昭和二十年四月 チチハル

” 七月 山神府

” 八月 孫呉(武装解除)

入 ソ 昭和二十年九月

復 員 昭和二十二年四月 舞鶴上陸

〈職 歴〉

昭和二十三年九月 西川村第一農業協同組合

昭和二十五年七月 自営(燃料商)

昭和四十八年四月

← 津川町商工会理事

平成二年五月

昭和四十八年四月

← 東蒲原軍交通安全協合理事

平成三年四月

昭和三十三年四月より 新潟県プロパンガス協合理事

東蒲原地区支部会長

昭和四十年五月 東蒲原郡燃料組合設立

代表理事

昭和四十六年十月 東蒲原郡プロパンガス保安協会

設立

理事(平成二年四月理事長)

昭和四十六年八月 東蒲原郡異国会設立

事務局長

昭和五十二年七月 恩欠連東浦支部連合会設立

会長

昭和五十二年九月 全抑協東浦原支部連合会設立

事務局長(平成五年六月連合会長)

(新潟県 吉田 忍)

私の青春・シベリアが憎い

福井県 天谷 小之吉

昭和十八年徴集、十九年二月広島へ仮入営、満州第六二二部隊へ入隊しました。

兄が昭和十三年北支で戦死しているのです、故郷を私が出る時、父母はどんなにと思ったが、笑顔で送ってくれたので、安心して出征することができた。

二月とはいえ北滿の瓊瑋ではまだ毎日零下十度は下がって荒野は銀一色だった。

五月の検閲までは自由もなく、ただ厳しい教育訓練ばかりでした。終わると待っていたのが、陣地の対戦

車壕構築作業でした。そして、時折歩哨勤務もするころ、九月内地より補充兵の入隊があり、私は教育助手として活躍することになりました。

また、翌二十年二月に内地入営と現地入営の折半の初年兵教育助手もして、五月の検閲を終りとして、今度は二站陣地構築作業に行きました。八月九日、突然日ソ開戦となって、北鎮台陣地に戻りました。

戦争は二十一日まで続きました。もし、十五日の停戦がその日にわかっていたら、犠牲はもっともっと少なかったと思う。

武器を捨てた裸の関東軍将兵は、ウラジオ経由東京ダモイの言葉をまともに受けて、ソ連へ拉致されてしまった。そしてソ連で待っていたのは強制重労働でした。

ソ連は衣服もあてがわず、私たちは満州から着のみ着のまま。それをまだ銃を突きつけて略奪されるありさま。着替えが無いから雨の日も雪の日も、着たまま、着干しの連日でした。不潔になってやって来るのが、蛋、虱、南京虫、連日攻められて寝不足。